

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520155

研究課題名（和文）：近代日本の大衆メディア文化における「南方」イメージの形成と展開

研究課題名（英文）：The Formation and Development of the Images of “South” in Japanese Modern Media Culture

研究代表者

田畑 雅英（TABATA MASAHIDE）

相模女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：50171872

研究成果の概要（和文）：小説、漫画、映画、演劇・音楽劇、音楽、絵画・図像など、近代日本のさまざまな表現ジャンルにおいて、特徴的な「南方」の文化イメージが認められる。本研究では、そうした南方の文化イメージが、とりわけ大衆文化に鮮明に認められることに着目し、資料調査・分析を行い、それをもとに、典型的な事例についての研究を重ねた。それを通して、それぞれの表現ジャンルに表現された「南方」イメージの特質と、それらに通底する共通の特質を分析・考察した。それらの特質を一定程度明らかにすることによって、今後の研究展開の橋頭堡となる成果を得たと考える。

研究成果の概要（英文）：We can find some characteristic cultural images of “south” in many genres of Japanese modern cultural expression: novels, comics, films, plays and reviews, music, pictures and so on. These images are especially remarkable in popular culture. This study was carried out based on the research and analysis of the material of some typical cases. Images of “south” expressed in each genre of Japanese modern popular media culture were analyzed to discover some common characteristics. This analysis shows some important properties of the cultural images of “south” in Japanese modern popular culture, and will open a new perspective for future systematic studies on this theme.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2012年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |

研究分野：メディア文化学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：メディア文化、大衆文化、南方、大衆メディア、近代

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代日本のさまざまな文化ジャンルに見られる「南方」イメージについては、それぞ

れの作品や作家などに関する個別研究の中で言及され、論じられることはあっても、「南方」イメージそのものを対象とした研究はき

わめて少なかった。

(2)「南方」イメージに限らず、大衆によって漠然と保持されたさまざまな文化イメージは、現実との整合性を問われることはあっても、イメージそのものを対象として研究が行われることは稀であった。

(3)「南方」イメージは大衆文化に多く豊かな展開を見せているが、大衆メディア文化についても、研究対象として、かつてのような偏見は薄れたとはいえ、いまだに本格的な研究対象とされることは必ずしも多くなく、多くの究明が待たれている状況であった。

(4)上記の状況の中で、研究代表者は、映画・音楽劇・小説などの表現メディア研究を通して、「南方」イメージ研究の必要を痛感し、研究着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、日本の大衆メディア文化に特徴的な「南方」イメージの形成と発展の過程を検証し、その特質と文化・社会との相互影響作用を解明する試みである。

近代日本にとって、赤道付近の「南方」はしばしば重要な意味を帯びていた。経済的な市場として南方の諸地域が求められ、また、石油が主要なエネルギーとなった以後は、鉄鉱石も含めた資源地帯として、「南方」は注視の的であった。また、海外移民もまた、多く「南方」をめざして行なわれてきた。

こうした事情を反映して、とりわけ明治以後展開した多くのメディアには、「南方」のイメージがしばしば現れる。そこにはしばしば、現実と乖離した夢想や、偏見に基づく点も多く見られ、問題性も多く認められるが、南洋を含む「南方」イメージが、日本文化の重要な一面を担ってきたことは確かである。本研究は、さまざまな大衆メディア文化の中で、「南方」イメージがどのように生成され、発展していったかを、社会事象との関連も顧慮しながら、解明しようとするものである。

近代日本固有の「南方」イメージは、大衆文化の中に最もよくその特質を示しており、本研究の中心的な対象もそこに置かれるが、「南方」イメージは狭い意味での大衆文化に限らず、純文学などのいわゆるハイブローな文化にもさまざまな形で浸透しているので、大衆メディア文化以外にも、関連の文献や資料は可能な限り広く渉猟し、研究内容の妥当性を高めることをめざした。

対象となるメディアは多岐に渡るが、本研究は総合的研究の端緒に位置する面を持つものであり、期間内に一定の成果を収めて、さらに発展的な研究につなげてゆくために、重要な事例研究を中心に構成した。なお、本

研究は、個別の作品や事例の芸術的な価値評価を問うものではなく、「南方」イメージの解明を目標としたものである。

本研究は、これまで散発的に発表されてきた先駆的研究を受け継いで、体系的な研究への道筋を拓くことを意図した、端緒的研究の性格を持ち、さらに新たな視野への展開が生まれるための橋頭堡を築くことを意図した。

3. 研究の方法

研究目標を達成するために、以下の方法に従って年次計画を立て、研究を行った。

(1)「南方」イメージの形成と発展に関わる関連文献・映像資料・音声資料などを収集調査し、それを分析することによって、近代日本における「南方」イメージの形成・発展をあとづけ、その特質を考察した。

(2)日本の大衆文化研究者、大衆文学研究者、映画研究者、音楽研究家、漫画・劇画研究者、広告研究者などと意見交換・討議の場を持ち、検証と論議を深め、その成果を研究に反映させるよう努めた。また、文化的な関連において、対比すべき関係にあるクレオール文化など海外文化の研究者などとも、意見交換・討議の場を持ち、研究の視野を広げることをめざした。

(3)各メディアにおいて代表的と考えられる事例研究を段階的に組み上げ、総合的成果としてまとめることをめざした。

4. 研究成果

「南方」イメージは、戦前においては、国家の海外に向かったの「発展」をめざすために不可欠と考えられた南方資源地帯への「進出」、それと表裏をなす欧米先進諸国による植民地的な熱帯地域支配打破を謳った民族的意識昂揚などの支えによって、また、戦後においては、経済成長による南方への商業的進出や、豊かになった経済力に支えられた海外観光の展開などによって、日本国内での「南方」イメージが形成され、再生産され、消費されてきた。

日本の大衆メディア文化の中で表現された「南方」イメージは、いくつかの顕著な傾向を示している。それをリアルな表象と考えれば、現実の南方諸地域の状況とは必ずしも合致せず、むしろそれと乖離していることがしばしばであるが、日本の文化状況や日本人の心性の反映ととらえるなら、重要な示唆を含むことも多い。

以下に、各ジャンルごとに概略を記述したうえで、それらを通して見られる共通点を記述する。

(1) 小説・文学

小説でとりわけ顕著に「南方」イメージの特質を示すのは、日本に特徴的な大衆文学のジャンルである「秘境冒険小説」である。そのプロトタイプを確立したと見られる小栗虫太郎の「有尾人」(1939)を含む連作『人外魔境』(1939-41)が典型的に示すように、「南方」が太古の自然を残した地域として、西洋の先進的な機械文明に対置され、そこでの生命のあり方に失われた人間の生の祖型を見る作品群は、ヨーロッパの冒険小説が、熱帯を舞台としても、そこをヨーロッパとは完全に異質な未開の世界と把握し、その中で登場人物が近代ヨーロッパ的な価値観をあくまで保持しているのとは対照的に、近代化した日本や世界の文明観に根本的な疑義を呈し、失われた自然との再度の一体化を希求した点において、近代日本の「南方」イメージが根本的に孕む特質を明確に示している。

このような存在の原点への回帰志向を示す一方で、南方を舞台とした「秘境冒険小説」は、橘外男の『令嬢エミーラの日記』(1939)などのいわゆる人獣婚姻譚などが示すように、いったん文明化した人間の立場から、再び前文明状態に遡行する恐怖と嫌悪も映し出した作品群も生んでおり、そのアンビヴァレントな状態の中で、作品ごとにいずれに偏るかの違いは見せながら、陸続として多くの作品を生み続けており、こうした「南方」イメージに対して日本人が寄せる共感の深さと、問題意識の継続を裏づけている。

(2) 映画

映画において、上記の「秘境冒険小説」に通ずる特徴を示すのは、『ゴジラ』(1954)以後、ほぼ同一のパターンを踏襲しながら、半世紀以上にわたって多くの作品が製作された「怪獣映画」のジャンルである。多くの場合、太古に絶滅した恐竜が、核実験などの現代文明の負の影響によって現代に蘇り、都市部を破壊していくというパターンを繰り返して描き続けているが、これに先行した『キング・コング』(1933)に代表されるアメリカの同種の映画が、多く実在の動物を単純に巨大化させ、都市で暴れる巨大生物が、実存する人類の先端兵器(たとえば『キング・コング』の飛行機)の攻撃によって絶命するという、文明に対する脅威と、文明によるその脅威の排除という形をとるのは対照的に、日本の映画が描く「怪獣」は、超生物的な力をもって近代文明を蹂躪し、その攻撃を受け付けない。しかも登場人物たちは、自分たちの社会への脅威であるはずの怪獣に、文明へのアンチテーゼを見、ある種の共感と、西洋文明の中に暮らしながら、その中で抱き続けている違和感を意識化するのである。同じパターンの再生産は大衆文化の一つの特徴であ

るとはいえ、近代日本の、とりわけ都市民に顕著なこの違和感の根深さが、これほどまでの怪獣映画の量産につながっていると考えられる。

映画において顕著なもう一つの「南方」イメージは、とりわけ太平洋戦争を題材とした戦争映画に見られる、「飢餓」のイメージである。これには、戦時中のガダルカナル島をはじめとする南方の島々での日本人の悲惨な体験が反映していることは疑いがなく、本来天然の食料が豊かなはずの南洋で飢餓に苦しむという、ある意味で逆説的な体験は、映画においていわばより一般的なイメージに展開され、豊穡と飢餓を背中合わせにした環境として南洋を描くことによって、生存と倫理の問題を展開して見せている。

上記とまったく異なる様相を見せるのは、ハワイに代表される日常からの一時的な脱出の場であるリゾートとしての「南方」イメージである。戦後の経済復興と高度成長によって、実際に渡航可能なリゾート地として射程に入っていたハワイは、しかし、実際の渡航者が増大していく状況にもかかわらず、映画の中では、渡航が容易ではなかった時期に形成されたイメージが繰り返し再現されるという現象が見られる。さらに、映画においては、香港、メキシコなど、純粋な意味では必ずしも「南方」といい難い地域までも、いわば擬似的な南方として描く作品群が製作されていく。これもまた、戦後日本の経済復興とともに、観光または商用などで海外で周遊する地域が拡大していくことと規を一にした現象であるが、そこに見られるのも「南方」イメージの祖型のバリエーションであり、こうした文化イメージが、現地の実情についての知識・認識の広がりによって必ずしも是正されたり、消滅していったりするわけではなく、むしろ現実とは乖離したまま広がる可能性があることを示している。なお、グアム島など、戦時中に戦場となり、戦後リゾートとして認識されるようになった南方地域については、映画によって極端に異なるイメージで描かれており、いったん形成された「南方」イメージの諸様相は容易には混交しないことが示される。

(3) テレビドラマ

とりわけテレビ放送としては比較的初期に、『快傑ハリマオ』(1960-61)のように、さまざまな国や地域のイメージを貼り合わせた無国籍的な様相を見せる南方の地域で活躍する日本人男児を描く少年向けドラマが制作されており、一面では戦前戦中の南進政策を正当化するために掲げられた民族協和的な発想に通ずる要素を背景に見ることもできる。一方で、『月光仮面』(1958-59)においても同種の無国籍的な「南方」イメー

ジが出現しているが、それがしばしば「悪」と結びつけられているのは、「南方」イメージの負の側面の表現にほかならない。歴史的・地理的事実を故意に歪曲した設定と展開の中で、むしろ自由に「南方」イメージを表現しうることが示されるとともに、終戦によっても「南方」イメージの根幹が本質的には変化していないことの一つの証左となっている。

(4) 絵物語・漫画

漫画の前身とも見なされる絵物語においては、SF的な作品と並んで、南方を舞台とした作品は中心的な位置を占めていた。山川惣治の『少年王者』(1947)『少年ケニヤ』(1951-55)などが典型的に示すように、多くは主人公を日本人の少年とし、何らかの事情によって、南方の異国の地で、動物や現地の部族民などと交流ないし対立しながら成長していく過程を描く物語は絵物語にしばしば見られ、近代的な都市的環境とは対極的な、熱帯の過酷な自然の中での主人公のたくましい成長と、白人中心の世界観に対立する視点を身につけていく。

とりわけ、こうした絵物語の舞台がしばしば南太平洋よりもアフリカに置かれるのは、ヨーロッパ諸国の植民地から戦後にしばしば独立の動きが起こったアフリカにおいて、日本の歴史的現実から離れた一種の世界正義の実現というテーマを描きやすくするという意図が介在していると考えられる。

こうしたアフリカを中心とした「南方」を舞台とした主人公の「成長」は、漫画においても、たとえば主人公を人間からライオンに置きかえた手塚治虫の『ジャングル大帝』(1950-54)などに受け継がれていく。主人公の「成長」は、多くの少年漫画において基本的な理念の一つとなっているが、そこに「南方」が組み合わせられることによって、主人公がいわば世界的な視野での「正義」を身につけていくことが描かれる。

(5) 舞台

女性のみによる上演という特異な形で日本にミュージカル的な音楽劇とレビューを導入した宝塚歌劇は、基本的に、一貫したストーリーをもつ音楽劇と、より自由な構成をもつショーという二部構成で公演を行っているが、とりわけショーにおいて、「南方」的なイメージを展開した場面を織り込むことがある。全編を「南方」的イメージから構成した『ノバ・ボサノバ』(1971)などにおいては、南方・カーニヴァル・解放感・自由な恋愛などの連想連鎖による舞台が展開される。これらは多くのショー作品において、こうした連鎖をあらかじめ心得た観客たちの前で、繰り返し現れ、短い場面の中でも観

客はその連鎖をもったイメージ全体を反芻することになる。これは「南方」イメージの消費の典型を示している。

(6) 音楽

日本の大衆音楽の中で、南方系のリズムやイディオムは、刺激的な彩りを添えるものと考えられ、キャバレーなどのダンスの伴奏音楽で多く好まれたことが典型的に示すように、日常生活の中での一時的な解放、とりわけ性的タブーからの自由な逸脱という「南方」のイメージがそこに重ねられる現象が見られる。

近代日本が自らの音楽を再構築するための範としたのはヨーロッパ音楽であったが、19世紀に音楽の一つの中心となりながら、その世紀の途中から、頂点を形成するとともに崩壊に向かって歩み出したヨーロッパ音楽にとって、異質な世界の音楽は一種のカンフル剤であり、ヨーロッパ音楽にはない色彩感をもって刺激を与えるものであった。ラヴェルの歌曲『マダガスカル島民の歌』(1925-26)はその一つの例であるが、そこにおいて民族の音楽は異質で新鮮な、自己の外部にある音楽としてとらえられ、再創造されている。近代日本の作曲家芥川也寸志は、明らかにこの『マダガスカル島民の歌』を視野に置いて歌曲『パプア島土蛮の歌』(1950)を作曲したが、この作品において、パプア島の音楽は、内部化され、民族的な感性において共感される音楽として再創造されている。このように、「民族」的な南方の音楽は、「民族的」=「非ヨーロッパ的」という回路を経由することによって、日本内部の音楽と同質の位置に置かれる可能性を持つが、この傾向は、芥川の師にあたる伊福部昭の、とりわけ多数の映画音楽において著しい。そこでは多くの南方風のイディオムによる音楽が、南方を舞台とした映画の表現強化のために書かれているが、上記のような理論的回路を経ない多くの日本の南方風映画音楽(それはある意味でヨーロッパの作曲家たちが非ヨーロッパ的な南方音楽に惹かれ、再創造を試みたのと似た意識過程で作曲されている)に比べて、はるかに強い表現力を持っていることが確認できる。

上記以外にも、広告、絵画・図像など、さまざまな大衆メディア文化の中で、長期間にわたって「南方」イメージが展開されており、上述のように、近代日本の「南方」イメージは、さまざまな大衆メディア文化の中で多様な展開を示してきたが、いくつかの点において共通の特徴を有している。

まずあげられるべきはもちろん、日常を離れた楽園としての「南方」のイメージである。極彩色の色彩と陽光に溢れる世界が「南方」のイメージとされるのは日本に限らないが、

こうした普遍的なイメージが日本の大衆メディア文化にも共有され、豊富に用いられていることは事実である。

しかし、日本のメディア文化の「南方」イメージに固有と思われるのは、近代西洋文明に対置される根源的な自然と、本来帰属すべきでありながら失われてしまった何ものかを示唆していることである。この側面において、「南方」は単なる未開の異郷ではなく、むしろ原郷と呼ぶべきものであり、日本もまた外部から受け入れて久しい近代西洋文明は、この原郷から離れた、否定すべきものと見なされる。それは、近代の日本が、自らもまとわざるを得なかった西洋文明への違和感の反映でもある。

さらに、「南方」において、楽園的なイメージと背中合わせに、飢餓や熱病、グロテスクな爬虫類といった様相が、直接体験の相においてイメージされることも、日本のメディア文化の「南方」イメージに見られる特徴である。これには戦時中の南洋体験の集団的記憶ともいべきものが影響していると同時に、上記の「原郷」から離れた者が、自らの根源に抱く一種の恐怖心とも関連している。この点で、近代日本の大衆メディア文化に見られる「南方」イメージは、アンビヴァレントな様相をはっきりと示しているのである。

今回の研究は、それ自体豊かで多様な広がりを持つ「南方」イメージの体系的な研究の端緒となるものであり、今回の研究期間がひとまず終了した後、研究と成果発表を継続すると同時に、今後はさらに他分野の研究者との協働も視野に入れつつ、研究を展開していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- ① 田畑雅英、近代日本の大衆メディア文化と「南方」イメージ、印刷冊子、査読無、2013、1-52
- ② 田畑雅英、キング・コングのクロノロジー、印刷冊子、査読無、2012、1-32
- ③ 田畑雅英、「有尾人」と秘境冒険小説の成立、相模女子大学紀要(人文系)2010年度、査読無、Vol. 74A、2011、71-80

[学会発表] (計 0件)

[図書] (計 1件)

- ① 有賀忍、田畑雅英、他、相模女子大学・相模女子大学短期学部、2010年講演録、2011、48 (「なぜ怪獣は南の島に住み、東京を襲う

のか — 娯楽映画から読み解く文化論 —」16-24 を執筆)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

① (講演) 田畑雅英、なぜ怪獣は南の島に住み、東京を襲うのか — 娯楽映画から読み解く文化論 — 、相模女子大学相生祭研究発表、2010年11月3日、相模女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田畑 雅英 (TABATA MASAHIDE)
相模女子大学・学芸学部メディア情報学科・教授
研究者番号：50171872

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：